

# ‘Points of View’ にあらわれた W. S. Maugham の短篇小説観

脇 田 勇

- I . ‘Points of View’ の短篇小説観
- II . Maugham の短篇小説
  - (1) 短篇小説の狙い
  - (2) 描写の技法

## I . ‘Points of View’ の短篇小説観

1962年 *Show* 誌上に *Looking Back* という回顧録をのせているが、1958年に出版された *Points of View* は作者自身が語っている如く、恐らく彼の生涯のピリオドになると思われる。その中の5編の essay はそれぞれに Maugham 研究者の見逃し得ない意味を持っている。その中の4番目の *The Short Story* をとりあげ、已に各所で述べて来た彼の短篇小説に対する考え方を跡づけてみたいと思う。

物語をすることは、人間自然の本性であり、古代の獵人が、夜仲間と共に腹をみたしたあとの暇つぶしに、洞穴の焚火のもとで、何か珍しい出来事を、語った時にはじまったものである。今日でも東洋の都市では *story-teller* が市場で熱心な群衆にかこまれ、過去からの伝承を語っている風景が見られる。しかし文学的産物としての力を持ったのは19世紀に入ってからである。歴史的には、ギリシャに起源を持つ宗教的説話あり、中世の教訓的物語あり、不滅の光を放つ *Arabian Nights' Entertainments* もあった。ルネッサンスを通じて、イタリー、スペイン、フランス、イギリスに短かい物語が流行した。Boccaccio の *Decameron* と Cervantes の *Exemplary Tales* (模範小説集) とはその不朽のモニュメントである。しかし *novel* (長篇小

説)の流行とともにこの流行は衰えた。しかし19世紀のはじめ、一つの新しい出版物の形式が読書界に提供され、それが驚くべき人気を博した。いわゆる annual (年報)である。ドイツにはじまったらしく Schiller の *Maid of Orleans* や Goethe の *Hermann and Dorothea* は最初この種の定期刊行物にのせられた。イギリスの出版者が真似をするようになると、かれらはこの企てを利益の多いものにするため、主として短篇小説を頼りに十分な数の読者をひきつけようとした。19世紀のはじめ、annuals (年報) とか keepsakes (年刊詩文集) とかが、短篇小説を通じて、作家たちに、読者にまみえる機会を与え、従って数多く書かれはじめた。

アメリカでは、これらの刊行物がきわめて才能ゆたかな一派の作家達を輩出させたので、短篇小説はアメリカの発生と主張する人もあるが事實は相違する。

Maugham は近代短篇小説家を論ずるに当って第一に Maupassant をあげて、彼以上に見事に書いた人はないと言い *La Parure* (頸飾り) の一篇をとりあげて、Maupassant の短篇手法を説明している。この種の物語には beginning と middle と end とがなければならず、終りに達した時には、話すべきことが話し尽くされていなければならず、それ以上訊く必要が起ったりしてはならない。この小説の場合、作者は ironic で effective な結果をつけることで満足している。〈 Maupassant のような作家は人生を模写するのでなく、より一層興味をもたせ、興奮させ、驚かせるために、人生を arrange するのである。人生の転写を狙っているのではなく、その戯曲化を狙っている。効果を出すために、本当らしさを犠牲にする。問題はそれがうまく行くかどうかにかかっている。もし描く事件やその関係する人物に無理があることが気づかれるなら、それは作家の失敗である。〉と語っている。

Such an author as Maupassant does not copy life ; he arranges it in order the better to interest, excite and surprise. He does not aim at a transcription of life, but at a dramatisation of

it. He is willing to sacrifice plausibility to effect, and the test is whether he can get away with it; if he has so shaped the incidents he describes and the persons concerned in them that you are conscious of the violence he has put on them, he has failed.

(W. S. Maugham: *Points of View*, p. 153)

事実全ての fiction においてはある種の嘘が問題なく受け入れられている。それは虚構の小説では、そういうものはごく普通であり、作者が遅滞なく話を進めて行くのに、どうしても必要なものであることが、しばしばある。この様な短篇小説の canon (規範) は Edgar Allan Poe ほど正確に述べたものはない。Poe は何をもって良い短篇小説としたかという、それはちょっと腰をおろした間に読み通し得る物質的、あるいは精神的のただ一つの事件を扱った一篇の fiction である。イギリスでは Rudyard Kipling ほどこの canon に従って短篇小説を書き得たものはなかった。イギリスの短篇小説家の中で、フランスやロシアの巨匠と比肩できるのは彼一人である。彼は素晴らしい、多彩な、独創的な物語作者であった。彼は豊かな発明の才能を持ち、人を驚かせる dramatic な形式で事件を物語る才能を備えていた。彼はいわゆる異国趣味の短篇小説の発見によって、作家たちに新しい、実り多い領域を開拓したことである。それは大多数の読者にほとんど知られていない、ある国に舞台をおいた短篇小説である。異境での滞在が、白人に及ぼす影響、人種も違い、肌の色も違う諸民族との接触が彼に及ぼす効果を扱ったものである。

monthly magazine (月刊雑誌) があらわれ、大変な数の読者をひきつけるようになり、こういう物語に対する需要が増大すると、作家たちはきそってそういう trick を身につけた。これらは物語を効果的にするのに、使い古された構想を多用するようになり、間もなく、人生の描写においてあまりにも本当らしさから逸脱したため、読者に背を向けられてしまった。読者は陳腐な pattern に従って書かれた短篇小説に飽きるようになった。実人生

では何事もそんなにうまく行くものではないと抗議した。すなわち読者はもっと大幅な realism を求めるようになった。短篇小説において、自然主義が19世紀に流行するようになったのは、退屈になった romanticism に対する反動であった。

所がこの formula (公式) が少しも行なわれていなかった国、それはロシアであった。Turgenev の短篇が Goncours (ゴンクール兄弟) や Flaubert に迎えられた世紀のはじめ、Anton Chekhov の短篇がフランス語に訳され、好意をもって読まれた。

Maugham はこのロシアの作家の技法を語る前に、相当のスペースをその伝記にさいている。Chekhov は短篇小説の技法に非常に関心を示し、面白い意見を吐いているという。すなわち、Chekhov は、短篇小説は余分なものは一切含んではいけないと主張し《もし第一章で壁に銃が掛けてあったと書いたら、第二章か第三章で、その銃は必ず発射されねばならない。》と説いている。Maugham は、彼の自然描写は簡潔で的確であると見ている。更に Chekhov は Maupassant を手本にしたと語っているが、Maupassant は彼の書く小説を dramatic にすることを望み、その為には、必要なら、本当らしさを犠牲にすることすらしたが、Chekhov は dramatic なものを極力さけようとしたというのである。Maugham は更に物語を作り出す為には、人々は会社で小銭を盗んだり、賄賂を受け取ったり、自分の女房をぶったり、だましたりしなければならぬことは確かで、たとえ、野菜スープを食べるにしても、それには何らかの意味がなければならぬはずである。例えば、それは幸福な家庭生活のシンボルであるとか、あるいは、破れた家庭生活の苦悶のシンボルであるとかでなければならぬと説明する。Chekhov は自分の描写する色々な事件に、異常なまでの迫真力をもたせることができた。しかし彼の冷静さは多数の同時代の作家に対する侮辱と見なされ、攻撃された。その非難の一つは、社会的諸条件に無関心であるように見えたことである。ロシアの作家は当然そういうことがらを扱わねばならぬ

というのが、intelligentsia の要求であった。しかし Chekhov は作家の仕事は事実を述べることで、その事実についてどうすべきかは、読者の判断にまかせるべきであると考えていたのであった。すなわち芸術家は狭い専門的な問題の解答を求めらるべきでないと主張した。

この Chekhov の態度は、ある意味で、Maugham の短篇を読んで感ずることで、有名な The kite という短篇を取り上げてみても、あの中の息子の心理の解釈を読者に要求しているし、また彼の短篇の中で最も陰惨なものの一つと考えられる The Unconquered では、ドイツ兵の暴力で妊娠したフランス娘が、そのドイツ兵の求婚を拒絶しつつ、子供を生むのであるが、その途端に川に行き、水につけて殺してしまうのである。母親の質問に対して《私はしなければならぬ事をやってきたのです。赤ん坊を川につれて行って、ことされるまで川につけました。》と娘に答えさせ、自分は征服されなかったと言わしめているが、その娘に対する倫理的解釈は何一つ下していない。その解釈は常に読者に残されている。The Kite の書出しは次の様になっている。

I know this is an odd story. I don't understand myself and if I set it down in black and white it is only with a faint hope that when I have written it I may get a clearer view of it, or rather with the hope that some reader, better acquainted with the complications of human nature than I am, may offer me an explanation that will make it comprehensible to me.

(The Kite, *The Complete Short Stories of W. S. Maugham*, Vol. III, p. 1236)

この Chekhov 論の結びに例の皮肉をこめて〈実際には単なる小説と言うようなものは存在しない。作家は小説を書くとき、往々にしてそれを面白いものにしたいという以外の何の意図も持たずに書きながら、知らず知らずのうちに実人生の批判を行なう。〉と語り、又〈わたしはたいいていの人々が小説を読むのは、ほかにたいしてする仕事がないからだと思う。かれらは愉

しみの為に読むのであり、又そうすべきである。〉とも言っている。

In point of fact there is no such thing as a 'mere' story.

When he writes a story, the author, sometimes without any more intention than to make it readable, willy-nilly offers criticism of life. (*Points of View*, p. 174)

I suppose most people read works of fiction because they have nothing much else to do. They read for pleasure, which is what they should do... (Ibid.)

そもそも fiction の作品がわれわれの暮しのために是非とも知っておかねばならぬ問題について信頼できる情報を提供し得るはずだなど考えるのはよほどどうかした人間であって、〈小説家は、その創造的才能のそもそもの本質から、そんなことを扱う能力はない。彼の才能は議論することではなしに、感じ、想像し、発明することにある。〉と辛辣にその本質をついている。

By the very nature of his creative gifts the novelist is incompetent to deal with such matters; his not to reason why, but to feel, to imagine and to invent. (Ibid., p. 175)

小説家は一方に偏した存在である。小説家が選ぶ主題、作り出す人物、そういうものに対する彼の態度はこのbias (偏向) によって決定される。彼の才能、彼の感情、彼の直観、彼の経験の表明であると説いている。

What he writes is the expression of his personality and the manifestation of his instincts, his emotions, his intuitions and his experience. (Ibid.)

更に眼を異国に転じて、二つの大戦の間によこたわる時代にその短篇小説が大いに敬重された作家として Katherine Mansfield をあげている。彼女の作品は、孤独な、敏感な、神経症の、病める女性——住むべく自

らえらんだヨーロッパに、ついに安住できなかった一人の女性——の魂の告白である。Mansfield が Chekhov の大きな影響のうけたことは一般に認められているが、恐らく Chekhov がなければ彼女の作品は大いに変わっていたであろうと述べている。

彼は過去の短篇小説の pattern を次の四つに分析する。

- (A) 舞台装置 (the setting)
- (B) 登場人物の紹介 (the introduction of characters)
- (C) 人物の行動及びその人物に対する行動 (what they do and what is done to them)
- (D) その結果 (the outcome)

(A)の舞台装置の effect は物語を楽しむに適した心の状態に読者をひきこむことか、あるいは物語に真実らしさを添えることにある。今日では省略する。(D)の結果を省くことは読者の想像力に対して一つの冒険である。何故なら読者はそこに描かれた状況に興味をもって読んでくるから、その状況がどんな結果になるか告げられないと欺されたと思う。結果が判然としておれば、省くことは効果的である。(B)と(C)とは絶対に必要なものである。そして Chekhov は(B),(C)の構成の短篇を何百篇と書き、またこの形式は Mansfield が好んで用いた pattern であった。彼女は一つの境遇をとりあげ、それに含まれている皮肉味、辛辣味、哀愁、不幸等々あらゆるものをしぼり出すことができた。彼女の Psychology や The Daughter of the Late Colonel は佳作であるが、技量ある作家なら誰にも書ける。彼女の特色の最もよく出ているのは stories of atmosphere (雰囲気の小説)として知られる諸篇である。雰囲気とは story を装飾するこまかな飾りつけを意味し、物語そのものは非常に稀薄であるためにその飾りつけなしでは存在し得ないような場合に用いられるようである。このような技巧を彼女は魅力的に用いることができた。彼女はすぐれた観察力の持主で、自然の諸効果、風土の香気、風と雨、海と空、果樹や花木などを、まれに見る微妙さで描出した。外見的には、た

たとえば一杯のお茶を飲みながらの何げない会話にすぎないものの背後にひそんでいる胸つぶれる悲しみを読者に味わわせることができる点にも、彼女のなみなみならぬ天分を認めている。この短篇小説観の最後を次の様に結んでいる。〈結局、作品に特別の興味を与えるものは、作家の個性である。Henry James の場合の如く、やや非合理的なものであろうと、Maupassant の場合の如く、やや下品なものであろうと、Kipling の場合の如く、騒々しく、けばけばしいものであろうと、それは問題でない。作家が明瞭に、独自の姿でそれを提示できる限りにおいて、その作品は生命を持っている。〉

After all, it is the personality of the author that gives his work its special interest. It does not matter if it is a slightly absurd one, as with Henry James, a somewhat vulgar one, as with Maupassant, a brash, tawdry one, as with Kipling—so long as the author can present it, distinct and idiosyncratic, his work has life. (Ibid., p. 188)

筆者は作者 Maugham の *Points of View* にあらわれた短篇小説観をできるだけ忠実に要点を拾いつつ祖述してきたが、次章において、この章で述べた考え方が、実際彼の短篇ではどのように表現されているかを考慮してみたいと思う。

## Ⅱ. Maugham の短篇小説

### (1) 短篇小説の狙い

第一時大戦後、それまで戯曲と長篇小説の作者であった Maugham は急に short story を書きはじめている。その頃、彼は中国や南洋その他の世界各地に、たびたび大旅行を試みている。したがって1921年頃から出はじめた彼の short story には、舞台を旅行に取材したものが多かった。前後7回にわたる旅行の収穫は、人間の多様性を直接に知ったことと人生観照の劃期的発展を経験したことである。狭い書齋から、London の社交界から、彼を広



潤な大洋や、原始の島々や、珍奇な異国の風景の中へ解放したが、それ以上に行く先々で出逢う種々の人間たちから得た、直接的、生々しい、人生の複雑な諸相に、異常な精神の開放を味わったのである。作家として成熟期に入った彼は、写真の感光板のように、これらの生態を忠実に写しとった。short story という文学形式が、このような効果を作り出すのに最も適切であることは言うまでもない。彼は旅行から得た新鮮な芸術的意欲のはけ口を旺盛な短篇小説の制作に見い出したのである。

彼の短篇小説を書く直接のきっかけはこの旅行の体験であろうが、しかし文学に志ざした Maugham の脳裡から常に離れなかったものは、人間に対する飽くなき追究心であった。〈これは私がつねづね思っていることだが、人間性についてはすべてを知りつくせるものではない。私が確実に言えることは一つしかない。それは、この世の中にはいつになっても、これはと驚くようなことが決してなくならないだろうということだ。〉と述べている。

As I am well aware, one can never know everything that is to be known about human nature. One can be sure only of one thing, and that is that it will never cease to have a surprise in store for you.

(A Man with a Conscience, *The Complete Short Stories of W. S. Maugham*, Vol. III, p. 1308)

又人間性の矛盾について *The Summing Up* 17章でくもし私が人間の悪いところだけを見て、よいところに眼をおおっていたら、責められても当然だと思う。……善良さほど美しいものはない。そして世間なみの標準からすれば、容赦なく非難されるような人の中にも、そうした善良さがいかに多くかくされているかを示すことは、しばしば私を満足させた。私はそれを見たが故に書いたのである。……善人が善良なのは当然のことだと思うので、欠点や悪徳を彼らのの中に発見する時、私は興味をひかれるのである。悪人の善良さを見る時私は感動するし、彼らの悪徳に対しては寛容に肩をすくめ

るだけで満足するのである。私は他人の番人ではない。人を裁く気にはなれないし、ただ彼らを観察しているだけで満足しているのだ。私の観察によると善人と悪人との間には、世の道学者が、私に信じさせようとしている程の違いはないように思われる。＞と言っている。

I think I could be justly blamed if I saw only people's faults and were blind to their virtues... There is nothing more beautiful than goodness and it has pleased me very often to show how much of it there is in persons who by common standards would be relentlessly condemned. I have shown it because I have seen it. It has seemed to me sometimes to shine more brightly in them because it was surrounded by the darkness of sin. I take the goodness of the good for granted and I am amused when I discover their defects or their vices; I am touched when I see the goodness of the wicked and I am willing enough to shrug a tolerant shoulder at their wickedness. I am not my brother's keeper. I cannot bring myself to judge my fellows; I am content to observe them. My observation has led me to believe that, all in all, there is not so much difference between the good and the bad as the moralists would have us believe.

(*The Summing Up*, Chap. 17)

実に端的に彼の人間観を吐露しているし、この人間観の理解なしに、彼の小説特に短篇の鑑賞は不可能であろう。彼の作品には解決がないが、この不可解な矛盾にみちた人間の魂を、不可解と知りつつ執拗に追いつめて行くのが、Maugham の作家としての仕事である。人間探究の手段として、宗教、哲学に拠りどころを求めず、又詩に酔いきれず、澄みきった彼の観察眼は、この虚無の人生を人間を映し出して行くのである。

*Of Human Bondage* の中で主人公 Philip の口を通して ぐ恰度織匠が、ある精巧な模様を織り出して行く時の目的が、ただその審美感を満足さ

せようとするだけにあるとすれば、人間もまた一生をそれと同じように生きていいわけであるし、また彼の行動一切がなにか全く彼自身の選択以外のものであるとしか考えられないとすれば、やはり同じように、その人生をもって、単に一片の模様意匠と観ずることもできるはずだ。〉と言わしめている。

As the weaver elaborated his pattern for no end but the pleasure of his aesthetic sense, so might a man live his life, or if one was forced to believe that his actions were outside his choosing, so might a man look at his life, that it made a pattern.

(*Of Human Bondage*, Chap. 106)

人間として生まれたということの不思議な事実をできる限り体験して喜びも苦しみも、愛と憎悪と、諸々の愚行や過失まで味わいながら、作家としての独自の pattern を織り出そうとしたし、事実織り上げたと言えよう。

*Of Human Bondage* の完成後に着手された short story の時期には、この絵模様の考え方が深く根を下していたのである。short story は、作者の片手間の労作でなく、人間とか人間社会の多彩さに対する貪婪な関心と驚異はこの形式を通じてはじめて実現できるという確信のもとに書かれたものである。

short story の特長として取りあげねばならぬことは、その手法の手がたさで一貫性、更にそれと対応する内容的面白さということである。その面白さは名人の磨きあげられた腕からのみ生れる芸術の極地と言ってもよい。その表現の巧みさの中には、19世紀の英文壇の巨匠達、すなわち Pater や Wilde 等の唯美主義の思想が何らかの形で影響しているとも言えようし、これらの作家とつながる Maupassant, Flaubert にも心酔していた彼として、当然その傾向を持つわけである。

第二には彼の多様性ということである。彼の人生観として *Of Human Bondage* に出てくる Persian rug がよく引用されるが、Maugham は複雑

多彩な人生を生き、書くことの上でも複雑華麗な人生を抱擁できるという自信のもとに、その作品を磨き上げてきたのである。意欲的に作家生活に入った当時の心境を次のように記している。〈St. Thomas's Hospital をやめて以来、私は教養を重んじる人達と暮してきた。私はこの世の中には芸術より大切なものはないと考えるようになっていた。私は、宇宙に意義を求め、そして発見し得た唯一のものは、あちこちの人々の作り出した美であった。表面的には、私の生活は変化にとみ、刺戟にみちていた。しかし一皮むけば、狭いものであった。今や私は新しい世界に入りこんだのだ。そして、私の中にある小説家としてのあらゆる本能は、その新奇さを吸収するために、嬉々として頭をもたげた。〉

Ever since I left St. Thomas's Hospital I had lived with people who attached value to culture. I had come to think that there was nothing in the world more important than art. I looked for a meaning in the universe and the only one I could find was the beauty that men here and there produced. On the surface my life was varied and exciting ; but it was narrow. Now I entered a new world, and all the instinct in me of a novelist went out with exhilaration to absorb the novelty. (*The Summing Up*, Chap. 53)

南海の島々の自然美は、先輩作家の Herman Melville, R. L. Stevenson, Pierre Loti が已に描き出している。Maugham の描いたもの、それはそこに生息する人間の生態であった。〈私を昂奮させたのは、私のまだ知らない人たちに後から後から会うことであった。私は想像も及ばぬほど多種類の動物が棲息する国に來た学者に似ていた。事実その多様さは戸惑いするほどであったが、私の観察力は、当時よく訓練されていたので、意識的努力なしに、気のついた一人一人を整理することができた。……文明社会にあっては、一定の行動律に従う必要のため、人間の個性が柔らげられる。教養とは彼らの顔をかくす仮面である。ここでは、人々は赤裸々の姿を示して

いた。これらの人々はおびただしい原始性を保存して来た生活に異分子として投げこまれ、因襲的な標準に自分を適応させる必要を感じなかったのだ。彼らの特異性は、なんら妨げられることなく生長の機会を与えられた。……彼らは長い間私と共に暮してきたいかなる人よりも本質に近いように思われた。……やがて、こうした雑多な印象に、想像力を刺戟されて、ちょっとした暗示とか、偶然の事件とか、都合のよい創作によって、物語の筋が、そうした人々のうちの最も明解な人々を中心として、自然の形をなしはじめた。＞と同章をむすんでいる。

... what excited me most was to meet one person after another who was new to me. I was like a naturalist who comes into a country where the fauna are of an unimaginable variety... They were of all sorts; indeed, the variety would have been bewildering but that my powers of observation were by now well trained and I found it possible without conscious effort to pigeon-hole each one in my awareness... In civilized communities men's idiosyncrasies are mitigated by the necessity of conforming to certain rules of behaviour. Culture is a mask that hides their faces. Here people showed themselves bare.. These heterogeneous creatures thrown into a life that had preserved a good deal of its primitiveness had never felt the need to adapt themselves to conventional standards... They seemed to me nearer to the elementals of human nature than any of the people I had been living with for so long... presently, my imagination excited by these multitudinous impressions, from a hint or an incident or a happy invention, stories began to form themselves round certain of the most vivid of them. (Ibid.)

彼の別な表現によると、都会人は一つの袋に入れられた小石のようなもので、圭角はすりへらされて、大理石のように滑らかになる。しかしこの人たちは、人間の赤裸の姿をしめし、その姿こそ Maugham には生命力の象

徴と映ったのである。

*The Summing Up* の55章に、自分の興味は、人間と、その人間の送っている生活であったと述べく私は写真の原板の感光性のような感受性を除々に発達させたようである。私がつくりあげた写真が、真実かどうかは、私にとっては問題でなかった。問題なのは、空想力の助けをかり、出会った一人一人から、もっともらしい調和をつくりあげられるか否かであった。それは実に面白い遊びで、わたしはよく夢中になってやったものだった。〉と、創作の喜びを告白している。旅は作家 Maugham の形成に色々の意味を持っていた。7回の旅行の後に、彼の到達した心境はどうであったか。*The Summing Up* 55章の結びはく私は教養から来る傲岸さを脱却していた。なんでも受け入れる気持だった。誰からも、その人が与えうる以上のものを求めようとしなかった。わたしは寛容というものを体得した。友人の善意に満足し、悪意には苦しめられなかった。わたしは精神の独立を得ていた。他人がなんと考えようと煩わされず、自分の道を行くことを体得した。自分の自由は求めたが、他人に自由を与える心構えはあった。人が他人によくないことをした時、笑って肩をすくめるのは易しい。しかし彼らが自分によくないことをした時、それはなかなかできないことである。わたしはそれが不可能だとは思わなかった。〉となっている。

I seemed to myself to develop the sensitiveness of a photographic plate. It did not matter to me if the picture I formed was true; what mattered was that with the help of my imagination I could make of each person I met a plausible harmony. It was the most entrancing game in which I had ever engaged.

(*The Summing Up*, Chap. 55)

I have sloughed the arrogance of culture. My mood was complete acceptance. I asked from nobody more than he could give me. I had learnt toleration. I was pleased with the goodness

of my fellows ; I was not distrssed by their badness. I had acquired independence of spirit. I had learnt to go my own way without bothering with what others thought about it. I demanded freedom for myself and I was prepared to give freedom to others. It is easy to laugh and shrug shoulders when people act badly to others ; it is much more difficult when they act badly to you. I have not found it impossible. (Ibid.)

*The Summing Up* の22章に〈人にふれられるのが好きでなく、人が腕を組もうとする時など、腕をひっこめないように、いつも少しばかり努力しなければならない。私は自分自身を忘れることが出来ない。〉と述懐しているが如く、非社交的内省的な性格、理知的な性格、こういう性格が、社会人生に対して、冷酷、非人情になるのは当然であるが、彼の人間形成に St. Thomas's Hospital の医学生として過した体験が大いに貢献したことを忘れることは出来ない。それは人間性についての知識を得た最初のものであったからである。自然科学的、唯物論的な世界観が彼らの心の中に蓄積された。London の文壇や社交界には、生々しい人間性を押し殺した虚飾が栄えていた。旅行は、内面的寛容さを彼に与えてくれた。short story はこのような自己再発見の記録として見て行くと、作家 Maugham の生涯の足跡を知る上に、重要な意味を持つことが判然としてくる。

*Points of View* の短篇小説観にもふれている如く、彼自身 Chekhov, Maupassant とよく比較される。彼は *A Writer's Notebook* の中で〈Chekhov に私は非常に好感の持てる精神を感じた。そこには、真に性格を持った一人の作者がいる。Dostoevsky のように、人を驚愕させ、恐怖させ、困惑させる野性的な力ではなく、人に非常に親しみをおぼえさせる力である。他の作家から得られぬロシアの秘密を、私は彼から教えられるような気がした。彼の視野は広く、人生の知識は経験からきている。……Guy de Maupassant は巧みな物語作家で、彼の傑作は見事だが、……しかし彼のあまり真実な人生とのつながりが無い。彼のよく知られている作品は、読んでいる間はおもしろ

ろいが、非常に技巧的で、それをまともに考える気にならない。人物は舞台上の人間像で、彼らの悲劇味は、人間のというより、人形芝居に感じるそれである。彼らの背景となる人生の外貌も、卑俗で曇っている。Guy de Maupassant は富裕な旅商人の魂を持っている。……ところで Chekhov となると、誰でも物語を読んでいる気は全然しないであろう。読んで特にうまいという所に気づかないから、これ位い誰でも書けると考えるかも知れないが、しかし誰も書けないというのが事実である。この作家は自分の受けた感動をそのまま言葉に表現することができるので、読者は彼に代って、そっくりそれを受け取ることができるのである……〉

In Chekhov on the other hand I discovered a spirit vastly to my liking. Here was a writer of real character, not a wild force like Dostoevsky, who amazes, inspires, terrifies and perplexes ; but one with whom you could get on terms of intimacy. I felt that from him as from no other could be learned the secret of Russia. His range was great and his knowledge of life direct.... Guy de Maupassant is a clever story-teller, effective at his best... but without much relation to life. His better known stories interest you while you read them, but they are artificial so that they do not bear thinking of. The people are figures of the stage, and their tragedy exists only because they behave like puppets rather than like human beings. The outlook upon life which is their background is dull and vulgar. Guy de Maupassant had the soul of a well-fed bagman ;... But with Chekhov you do not seem to read stories at all. There is no obvious cleverness in them and you might think that anyone could write them, but for the fact that nobody does. The author has had an emotion and he is able so to put it into words that you receive it in your turn....

(*A Writer's Notebook*, 1917, pp. 119—120)

Liza of Lambeth の序文で, Maugham は、この作品を書きはじめた



頃、Maupassant を手本にし、明快、直截に効果的に物語る天才を模範にしたことを幸福に感ずると語っている。たしかに Maugham の短篇に Maupassant 的な要素のあることは認められるが、更に一步前進して Chekhov 的なものへと歩を進めて行ったことが、短篇を時代的に追って行くと感じるのである。Rain を最初にした頃、若い頃書いた短篇同様どこの編輯者にも断わられ、もっと humorous なものを書けと勧められたのであるが、当時の彼は、憤りと諷刺の傾向が強く、雑誌界では歓迎されなかった。田中西二郎氏が短篇小説論の中で「自己の人間成熟の自覚、人間的存在の多様性の認識、したがって既存の道徳的人生観に律せられる種々の価値観からの解放、そしてそれらの精神的変貌がもたらした新しい小説家本能のめざめ——概括して言うことを許されるならば、こうした見地から見直された人生と人間への泉の如き感興が、彼を駆って短篇小説の製作という新たな genre への冒険にのり出させた。」(モーム研究、新潮社モーム全集、p. 41) と語っているが、まことに至言である。Arabian Nights' Entertainments も Decameron もこうした人間発見、人間理解を動機としたもので、Maugham もその流れの中に船を浮べた一人であったのである。

## (2) 描写の技法

短篇集 *Creatures of Circumstances* の冒頭の序言の中で、Maugham は次の如く語っている。〈歴史のはじまって以来、物語を聞く為にキャンプファイアのまわりに、又は市場に、郡をなして集まった。話を聞きたいという気持は、財産の意識と同じように、人間という動物には、深く根をはっているらしい。私は語り手以外のものに見せかけようとしたことはない。話をすることが面白いので、たくさんの話をしてきた。物語りの為だけに話をすることは、知識階級の人々には支持されない活動であることは、私には不運なことだ。私はこの不幸をがまんしようとつとめている。〉

Since the beginning of history men have gathered round the camp fire or in a group in the nearest market place to listen to the telling of stories. The desire to listen to them appears to be as deeply rooted in the human animal as the sense of property. I have never pretended to be anything but a story-teller. It has amused me to tell stories and I have told a great many. It is a misfortune for me that the telling of a story just for the sake of the story is not an activity that is in favour with the intelligentsia. I endeavour to bear my misfortunes with fortitude.

(*Creatures of Circumstances*, The Author Excuses Himself)

Maugham の短篇は面白いと言われる。事実面白い。しかしその面白さとは何であろう。結局彼の人間についての智慧と、それを story に組みたてる技法から来ている。すなわち話す芸のうまさと、作者自身の人生観照の態度とに関係がある。彼自身も〈作者はつねにいかさま賽をつかっているのだが、読者にその手の中を見せてはならぬし、筋の操作によって、いかなる歪曲が行なわれたが、読者にわからぬように、その注意をつなぎとめておくことができる。〉と述べている。

The author always loads his dice, but he must never let the reader see that he has done so, and by the manipulation of his plot he can engage the reader's attention so that he does not perceive what violence has been done him.

(*The Summing Up*, Chap. 59)

又 fiction と realism については同章の中で〈小説家は芸術家であることを主張するが、芸術家は、人生をそのまま写すのではなく、自分の目的にかなうように、人生から物語を作り出すものである。画家が画筆と絵具で考えるように、小説家は話の筋で考える。自分では意識しないかも知れぬが、彼の人生観、彼の個性は、人間の一連の行動として存在しているのである。過去の芸術家をふりかえって見るならば、芸術家が realism に余り大

きな価値を認めていないことに気づかざるを得ない。大体において、自然を形式的装飾として用い、折にふれて自然をそのまま写すのは、想像力のため、自然から余り離れすぎ、自然に帰るのが必要であると思われる時に限っている。＞とも語っている。

For the novelist claims to be an artist and the artist does not copy life, he makes an arrangement out of it to suit his own purposes. Just as the painter thinks with his brush and paints the novelist thinks with his story; his view of life, though he may be unconscious of it, his personality, exist as a series of human actions. When you look back on the art of the past you can hardly fail to notice that artists have seldom attached great value to realism. On the whole they have used nature to make a formal decoration and they have only copied it directly from time to time when their imagination had taken them so far from it that a return was necessary... (Ibid.)

Maugham は、plot を好んで用いる。彼自身も、興味を喚起された人間の身の上にどんなことが起るかを知りたいのは、読者の当然の願いであって、plot はその願いをかなえてやる手段なのだと考えているのである。彼の考える短篇とは、好みの長さの虚構の作品で、そしてそれは一つの場面 (situation) を扱うものである。その場面とは、情調 (mood) であり、人物 (character) であり、又事件 (event) である。

筆者は Maugham 短篇の特色のいくつかを拾いあげたいと思うのであるが、第一に、結局短篇では、人間の型、換言すれば、人間の多様性を描いていると言えると思う。人間の多様性に飽くなき興味を持ちつづけてきた彼として当然の事である。長篇の場合は、そこに人生観あり、宇宙観あり、多彩であるが、短篇では焦点をしぼって、人間追究を行なっている。普遍的なものから特殊なものへと逆に、特殊な人間から、普遍の真理への方角へと向っている。ある人間の型を通して、人間の一般性を考えせる所に、芸術的意

味を見出すのである。彼の短篇のどれを取り上げても必ずと言ってよい位、登場人物の外貌 (appearance) の説明がある。やや長いと思われるが、ここに引用すると、Mackintosh の中に出てくる Walker という南洋の島の行政官の描写がその一例である。〈彼は人並みよりも遙かに背の低い小男で、ひどく肥っていた。きれいに剃刀のあたった大きな肉づきの良い顔をして、だぶだぶした頬の肉が両側に垂れ下り、馬鹿でっかい顎が三重になっている。あるかなしかの目鼻立ちは、すっかり脂肪の中に溶けこんでしまっている。そして後頭部にある三日月型の白髪をのぞけば、すっかり禿げ上っていて、まるで Mr. Pickwick そっくりの人間である。とにかくグロテスクで、漫画的な人物なのである。それでいて不思議なことに威厳もなくはなかった。大きな金縁の眼鏡の後ろにある碧い眼は鋭く、活発で、顔には決断力が溢れていた。もう66才だったが、その生来の活力が、寄る年波に打ち克っていた。肥満している割に動作が機敏で、歩く際には、自分がどれほど重いかを大地に思い知らせてやろうとするかのように、のしのしと踏みしめて歩いた。彼はぶっきら棒などら声で話をした。〉

He was a little man, considerably less than of middle height, and enormously stout; he had a large, fleshy face, clean-shaven, with the cheeks hanging on each side in great dew-laps, and three vast chins; his small features were all dissolved in fat; and, but for a crescent of white hair at the back of his hair, he was completely bald. He reminded you of Mr. Pickwick. He was grotesque, a figure of fun, and yet, strangely enough, not without dignity. His blue eyes, behind large gold-rimmed spectacles, were shrewd and vicious, and there was a great deal of determination in his face. He was sixty, but his native vitality triumphed over advancing years. Notwithstanding his corpulence his movements were quick, and he walked with a heavy, resolute tread as though he sought to impress his weight upon the earth. He spoke in a loud, gruff voice.

(Mackintosh, *The Complete Short Stories* of W. S. Maugham,  
Vol. I, p. 141)

殆んど客観的と言ってよい外観の叙述を通して、その人間の人柄をほうふつさせ、しかもその助手である Mackintosh という、無口で、やせて、禁欲的で、教養あり、学者肌の青年との極端な対照を通して、やがて起るであろう運命の伏線のようなものまで予知させる描写力は、けだし名人芸と言ってもよい。

戯曲を書いているれば、伝統的な鋳型の中で、のんびり芸術三昧の境地に安住できた彼が、新石器時代、洞穴の焚火を囲んで話を語った語り手へ戻って行ったのは、彼自身語っている如く、話すことへの興味に外ならなかった。話すことが充分な目的であるとも語っている。彼は読者の興味を常に意識し、むき出しの思想をぶっつけることをしない。無意識の中に、思想を感得させる力を保持している。Mackintosh, *The Vessel of Wrath*, *The Colonel's Wife*, *The Mother*, *The Traitor* 等枚挙にいとまないが、いずれも suspense をもって読者をひきつけ、そしてそこに特異な人間性を浮彫りにし、しかも人間一般に対する共感を呼びおこす行き方をとっている。story の材料には、姦通、失意、没落、成功、殺人、奸計、冒険、放浪等々の異常な場面を設定する。この様な異常な場面においてこそ、人間の赤裸々の姿が露見するからである。場合によっては、*Footprints in the Jungle*, *The Letter*, の業な推理小説形式をとることすらある。

第二に取り上げたい点は、一人の人間の持っている相矛盾する二面を対照的に描写することである。*The Kite*, *The Mother*, *The Force of Circumstance*, *The Letter*, *The Promise* 等皆この類型に属する。彼はこの場合に倫理的判断など下してはいない。人間とはそういうものなのだと、むしろ肯定しているのである。短篇にしばしばあらわれる‘落ち’の根拠もここにあるのである。一人の人間が思わぬ結果におちいったとしても、人間の包蔵している本質的矛盾という点から見れば、当然の結末と言ってもいいわ

けである。

The Colonel's Lady を一例にとれば、大佐の夫人は貞淑の権化の様な人物であるが、その夫人の出版した詩集が大変な評判となる。所がその内容がある年下の青年との恋愛をあつかった、極めて sexy な内容のものであった。このことに夫は愕然とするのであるが、友人が〈相手の男は死んだのだし、それによって彼女もかえってほっとしてるのだから、今更事をあらだてることもあるまい〉とさとされて一応納得するのだが、最後の結びで大佐に〈But I'll tell you what, there's one thing I shall never understand till my dying day: What in the name of heaven did the fellow ever see in her?〉と言わしめている。作者はだからこそ人生は面白くてたまらんじやないかと言わんばかりの口調である。彼は〈技術的に‘落ち’と称するものについて、わたしは恐れを抱かなかった。論理に合わない時にのみ、それは非難されるのであるような気がしたし、またそれに加えられる不名誉は、それがしばしばなら、正当な理由なく、単に効果のためにつけ加えられたという事実によるものだと考えられた。〉

I had no fear of what is technically known as "the point."  
It seemed to me that it was reprehensible only if it was not logical, and I thought that the discredit that had been attached to it was due only to the fact that it had been too often tacked on, merely for effect, without legitimate reason.

(*The Summing Up*, Chap. 56)

我々の国の今昔物語や、宇治拾遺物語にも‘落ち’があり、近代作家、例えば、芥川竜之助の短篇などにも、これがある。このような surprise ending のみをとあげて、比較して見ることも、文学の特異性をさぐり出す鍵であろうかとも思っている。

次によく出てくる技法は、前述した Mackintosh における如き、Mackintosh の内向性と Walker の外向性を対照させるやり方である。人

間の世界には、相反する型があり、この相反する型が織り出す絵模様が面白いのだという人間観からすれば、当然生れて来ていい技法である。これあってこそ romantic と思われる物語にも、現実感がともなってくる。この対照が人生を味気なく悲惨にすると共に、反面豊かにし、神秘的にし、興味あらしめるのだと考えているのである。ここにこそ人生の哀感も humour も悲劇も喜劇も成立する。例えば *The Unconquered* の中で、純情可憐なフランスの田舎娘でも、追いつめられると、生んだばかりの赤児を河に沈めて殺すという残虐さを発揮すると語るが、何故かということには彼は答えない。Richard Cordell はく人は自分が、書くことが出来、又書かねばならぬような書き方をする。Maugham は言葉と材料に対する厳しい賢明な抑制の為、自分の意図した story-teller となれたが、それによって制限されることにもなった。すなわち Gide や Lawrence や Sherwood Anderson の如く、人間の不可解さの説明に努力することを我々が望んでいるのに、彼はその例証に満足していることが、しばしばある。と批判しているが、確かにその通りであろう。

One writes as he can and as he must, and Maugham's rigid and intelligent control over his word and material has enabled him to be the 'story-teller' he aimed to be, but it has imposed limitations. Too often he has been content to illustrate the unaccountability of man's behaviour when we wish that like Gide or Lawrence or even Sherwood Anderson he would *endeavour* to account for it. (Richard Cordell: *Somerset Maugham*, p. 168)

小説の手法という点から見ると、彼は20世紀的な新しさはほとんどないと言ってよい。‘意識の流れ’というような新しい手法には、むしろ反感を持っている。彼の発端、中間、結尾をもった小説は、むしろ20世紀の小説家は破壊に努力したのであった。Maugham に言わせると‘意識の流れ’が新しいと言うが、18世紀の小説が試みた、例えば Richardson の *Pamela*

などの書簡体の亜流であると、手きびしい。要するに小説は楽しませるものだから、気持よく読める形の中で、作家の言わんとする所を、もりあげれば事足りると考えている。手法に関する限りでは、Joyce, Woolf, Hemingway, Faulkner<sup>au</sup>, Huxley に及ばない。むしろ人間なり、人生を別な角度から見てい  
ると言った方が当を得ているであろう。Maugham に対する評価は様々である。Cyrill Connolly の如く、彼を偉大な小説家と考えるもの、Edmund Wilson の如く、何ら芸術家的才能なしと見るもの、実に様々である。Maugham 自身は、二流の前列あたりにいるのだと、うそぶいている。Cordell はく小説家としての自己評価において、Maugham は恐らく正鵠を得ているであろう。傑作においては、彼は比類のない story-teller であり、努力して明解さと、簡潔さと、快美な音調で書いているが、偉大な stylist ではない。彼は style (文体) について書いているが、自分が立派な文体を物にしたとは書いていない。彼の巧みな国語体の駆使、誇張された簡潔さと過激な表現の嫌悪、稀な修辞用法、fine writing (華麗体) の慎重な忌避は、話を推進する上に、直截さ率直さを効果的に持つことになるが、反面 Lawrence の生々としたリリズムの広さや、Proust や Dostoevsky の場合の人間の内的意識の深い探究や、Dickens, Balzac の奔放で素晴らしい世界、Tolstoy の人間愛を排除することになる。〉と批判している。

Maugham の小説は、とにかく過去60年間存在してきたし、最も知的人でないにしても、知識層に楽しく読まれている事実がある。人間の生存に関して、ますます不安のつづっている時代にあって、一般に小説が文学の一形式として重要さを失なうことはあり得ることだが、ここしばらくの間は、知的な小説の読者は *Of Human Bondage* を、*The Moon and Sixpence* を *Cakes and Ale* を、そして short stories を読むであろう。それらの主人公 Philip Carey や、Mildred Rogers や、Strickland や、Rosie が、Tom Jones や、Micawber や Becky sharp の仲間入りをするか否かは時間が解決するであろう。未来の文学の徒が Joyce, Kafka, Faulkner<sup>au</sup>, Sartre, そし



て Proust にうつつをぬかしている時、普通の知的な読者は Maugham の楽しい頁を満足げにくっていることであろう。筆者は彼を最も愛好している Cordell とともに、そうあれかしとひそかに願っている。

## Bibliography

### Texts

The Complete Short Stories of W. S. Maugham, Vol. I, Vol. II, Vol. III,  
Heinemann, 1959.

The Summing Up, Heinemann, 1960

A Writer's Notebook, Heinemann, 1952

Points of View, Heinemann, 1960.

### Reference Books

Richard Cordell: Somerset Maugham, Heinemann, 1961.

Karl G. Pfeiffer: W. Somerset Maugham, Victor Gollancz Ltd, 1959

モーム研究, 新潮社モーム全集 31巻

モーム研究, 英宝社

